

新島襄のこころ—イメージを通して— (11)

やがてにわとりなきぬ

竹 中正 夫

(大学神学部教授)

新島襄が滞米中に書き残したいいくつかの作品がボストン郊外のセイラムの博物館にある。その中には、新島家の紋章をつけ、鏡兜かがぶとをまとった人物像や日々に十字架を負うことについての聖書のことばなどがあることはすでに知られている。今回は、いままでもあまり紹介されなかった鶏の作品をとりあげてみることにする。

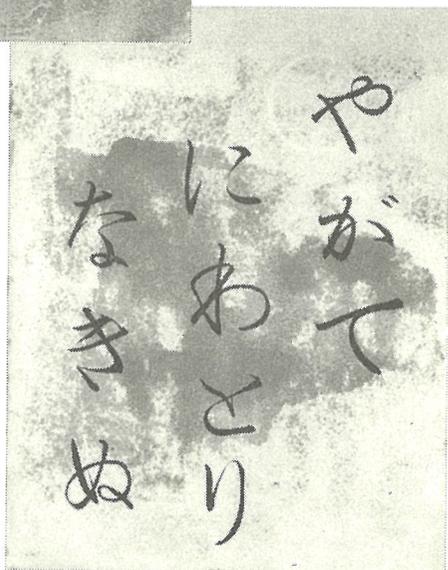
この作品は、いろはかるたのようになつて表裏一対のものとなっている。鶏の絵が表紙で、絵の左上に㊦の文字があり、裏には「やがてにわとりなきぬ」の文字が誌されている。これをどういう状況で、いつ新島が書いたかはわからない。わたしが推測するところでは、新島がニューイングラン

ドにいたとき、親しい友人たちから日本語を学びたいという注文をうけ、いろはかるたのようなカードを作ったものと思われる。興味深いことに、新島は聖書の物語に題材をとってカルタを作っていることである。画才ゆたかな新島は、聖書の物語を学び、そのなかから映像をえらんで表に丹念に描き、裏に聖句を假名で記したものである。

思うに新島は鶏のイメージを愛好していた。晩年大磯で新春を迎えてうたった「送歳」の詩にも「鶏鳴早已報佳辰」というくだりがある。自らは、旅先きで病を得て、疲労困憊こんぱいの状態にあった。しかし、新年の夜明けを告げる鶏の声に心よびさまされ

て、「尚社図を抱きて此春を迎う」と結んでいる。鶏は、夜明けの象徴であり、その声は夜のとばりの終焉と新しい朝の到来を告げる声である。

聖書においては、ペトロの離反を予告して、キリストが「はつきり言っておく。あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう」(マタイ二六ノ三四)と、いったにもかかわらず再三キリストを知らないと否定し、鶏が鳴いたあと悔んだという記録がある。この物語は、多少の表現は異なるが四つの福音書に記されており、よほど初代の教会に強い印象を与えていたものと思われる。ちなみに、今日スイスでは、教会堂の先端に鶏をつけているのは、プロテスタント教会に多く、カトリック教会では主として十字架をつけ、鶏は用いていない。新島が鶏のシンボルを愛したということは、いかにも日本人らしいし、また、プロテスタント的であるといえよう。



やがてにわとりなきぬ